

エルミナーージュ ゴシック リプレイ小説

彷徨の王、白銀の獅子王 2

【登場人物 その1】

	<p>・ターナ（人間／戦士） 放浪の旅をする戦士。 旅の途中で立ち寄ったイシュマグ王国で起こった異変の謎を突き止めるために、仲間とともにツン・クーン洞窟に踏み込む。 本編の主人公。</p>
	<p>・ドーガ（ワービースト／司教） 駱駝の姿をしたワービースト（と本人は言っている） 口が悪く、面倒な事に巻き込まれることを嫌うが、面倒見の良い面もある。 草食系肉食男子とは本人の弁。</p>
	<p>・シューネ（ノーム／薬草師） 医者を目指す薬草師の卵。 手先が器用でないためか、よく調合に失敗するようで、実験台という犠牲者が後を絶たないらしい…。</p>
	<p>・ナハト（ホートルット／盗賊） 仮面の下の顔も、その本性も謎のホートルットの盗賊。 忍者同等、もしくはそれ以上の能力を有しているという噂もある。 とある人物を探すついでにターナたちに協力する。</p>
	<p>・ツバメ（人間／侍） 旅の道筋で倒れていたところをターナたちに助けられ、その恩に報いるために共に行動する少女。 普段はお淑やかだが、あるものを目にすると…</p>
	<p>・ランベルド（エルフ／錬金術師） ターナたちよりも先に洞窟の探索をしていたパーティの唯一の生存者。 錬金術師の前は魔術師をしていた過去がある。</p>

*

冒険者たるもの、常に仲間が必要……だとも限らない。

中には、通常の半分、つまり3人程度で旅の工程をこなすパーティもあれば、たった独りで困難を乗り越えてきた歴戦の忍者もいる。

パーティと一口に言っても、6人きっかりというわけでもない。人それぞれ、種族それぞれなのだ。

先ほど洞窟内に踏み込んだパーティも、異色といえば異色であろう。様々な種族が入り混じったパーティというのは、さほど珍しくもないが、あのような冒険者を目にしたら、今までの自分の感覚を改めて考え直させる様な気になって仕方ない。

一度、イシュマグ王国に戻ったら、医者にも頭を診てもらおうかと、少し本気で考えてしまった。

「はつくしよい！」

間抜けな駱駝が、大きなくしゃみを一つ。

「誰か俺の噂でも、してたのか？」

だらしなく鼻を嚙りながら、辺りを見回す。

「ラクダさんでも、クシャミするんでしね」
「るせい！ チビガキはさっさと降りろ！」

駱駝の背中に乗ったノームの少女は、駱駝の背中のコブに必死にしがみついで抵抗する。

「あだだだっ！ 毛を掴むな、毛を！」

思いっきり毛を掴まれているために、涙目になりながらぶんぶんと、背中にしがみつく邪魔者を振り落とそうと躍起になっていた。

「そりゃっ！」

数分間の駱駝とノームの醜い争いは、体を大きく前にスイングして背中の毛を多少耨られつつも、邪魔者を振り落とすことができた駱駝が勝った。

「くそ、ちょっとハゲちまったじゃねーか！」

無残な我が背中をしげしげと見つめつつ、器用に崩れたトーガを巻き直す。

「さて、チビガキ様が降りたところで、仕切りなおしと行こうぜ」

一行の目の前には、大きな扉があった。微かながらにも、血と肉のようなものの腐敗臭が鼻に入ってくる。

それが、モンスターのものなのか、それとも……自分たちと同じ冒険者か。そんなことを考えていては、この扉の先には行けない。

意を決して、重い扉を開けた。

洞窟の中の冷たい空気が肌に当たる。

ひんやりとして気持ちいい位の冷たさだった。

洞窟といえば、もう少しジメジメとしていて、心地がいいとは言えない位の

湿度にまみれたものだと思っていた。

各々、あちこちの洞窟やダンジョンを目にしたリ、実際に入ったリしたことはあるだろうが、このような場所は初めてだった。

「調査とはいえ、油断していると雑魚でも寝首をかかれかねん。慎重に…」

ナハトが何事か呟いた時、奥のほうからなにやら叫び声が聞こえてきた。

「何だか頼りねえ悲鳴だこと…」

ドーガがため息をつくと、奥の扉から数人の冒険者たちが青い顔をしてこちらに駆け寄ってくる。その顔は、恐怖に引きつっている。

「どうしたんだ一体…!？」

ターナがそのうちの1人を捕まえて、事情を聞こうとするが、哀れな冒険者は口をパクパクさせたまま、泡を吹いて失神してしまった。

他の冒険者たちも、白目をむいて倒れこんだりしていた。

彼らは、一体この先で何を見たのかと、ターナたちは不安にかられたが、その“答え”が半開きになった奥の扉から、その足音のような音を立てながらこちらに向かってくる。

気絶した冒険者たちを安全なところに引き摺り、武器を構える。

徐々にその音が大きく、近づいてくる。

…かさかさ

…かさかさかさかさ

かさかさかさかさかさかさ

異様に乾いたような音を立てながら“それ”はやってきた。

「きゃあああああっ！」

真っ先に悲鳴を上げたのはツバメ。

彼女でなくとも、大半の世の女性はその姿を見ただけでも悲鳴を上げ卒倒するのではないだろうか。

——要するに“黒くて”、“素早い”、“アレ”

…であるのだ。

「アルティメット…!」

さすがの大口を叩く駱駝も、このときばかりは顔を引きつらせる。

「あれって、ゴキ…あうっ!」

最も一般的な、あの名称を言いかけたシューネは、錬金術師のランベルドに口を塞がれる。

「駄目です…! わかってもそれは言っでは…!」

「んーっ! んーっ!」

変な緊張感が一行に走ったが、何とか平静を取り戻し武器を構える。

この状況では、そうせざるを得ないだろう。

「あんなモノ」で逃げ出すようでは、この先が思いやられる。

むしろ、たかがアルティメットごときで逃げ出すようであっては、冒険者としても最低最悪だろう。

アルティメットランナー…。

見たところ、2、3匹といったところだが、早々に決着を付けねば仲間を呼ばれて始末に終えない状況になることが簡単に予想される。

事実、なりたての冒険者数名が、脅威の速さを誇る奴らと一戦交えて、惨敗するという事が多々ある。

「こいつらは、武器で叩き潰すより、呪文で一気に焼き切ってしまった方が、楽だぜ？」

「た、叩き潰すなんて滅相もないことを言わないでくださいませっ！」

ツバメは両腕に総立つ鳥肌を抑えながら、呪文の詠唱を始める。

侍でも、すべてを習得する時間は本職よりかかるものの、魔術師系呪文を唱えることができる。達人ともなれば、呪文を唱えながら余った手で刀を振り回すという、器用なことをやってのけるという、まことしやかな噂も耳にするところがある。その辺りは流石東方の職業といったところだろうか？

「はじめから大きな呪文は使いたくねえがなあ、速攻で片付けたい。という気持ちもある…さて、どうしたもんかねえ」

などと、独り言を言いながらも、バラドの小さな火の玉を確実に当てていく。

ギチギチと嫌な声を出しながら一匹が崩折れる。

「きゃー！ こっち来ないでえっ!!」

ツバメの悲鳴に合わせて、彼女の方向を見ると、一匹が彼女の近くにまで走り寄って来ていた。近くで見ると意外に大きいそれは、ツバメの足元でピタリと止まる。

「——イッ!?」

一瞬にして血の気が引く。顔面と言わず、体全体の肌の色が蒼白になっていくのが誰の目でもわかった。その後は気絶して倒れるのではないかと誰しもがそう予測した…

…が、

バシィッ!!

鞘を抜いていない太刀が、アルティメットの頭上にめいっばい振り下ろされていった。

その一撃で、その一匹は昇天した。

続けざまに、仲間を失って孤立した最後の一匹が逃げるのを見つけ、鞘を抜くのを忘れたまま、手当たり次第に振り回し、壁際まで追い詰めた後は、容赦なくその太刀を、相手が昇天した後も何度も振り下ろしていた。

その姿は、修羅のごとく鬼気迫るものだった。

人間は極度に恐怖したときは何をするかわからないと、人間以外の種族の面々がそう確信した瞬間だった。

アルティメットが自分のすぐ近くまで近寄って来たことで、それまで何とか保っていた平常心が事切れ、混乱状態に陥ったのだろうか。

相手を殲滅しても、恐怖の対象を殴り倒した太刀を構えたまま、辺りの様子をうかがっている。こうなってはどのようなでもない。

「あーあーあー。こりやお嬢さん重症ですなあ。おいチビガキ、混乱に効く薬なんざねーのか？」

「まだその製法は覚えてないでし。というか、こんなところで調合なんて出来る訳がないでし」

「…使えねえ薬草師だな。仕方ねえ。古典的だが…：うりゃ！」

駱駝がツバメの頭を死なない程度に殴る。

そう、「死なない程度に」である。初っ端から死亡されても、蘇生の資金繰りというものもあるが、何よりさつき入ってきたばかりなのに、早々に死体を引きずりながら出てくるもの恥ずかしいだろう。

しかし、当の駱駝はそんなことを思ってたか、そうでなくてかは分からないが、気絶させる程度の加減で殴った。

不意打ちされたツバメは、どさりとその場に倒れる。

「ミサーマ使うほど魔力も潤沢じゃねえし、起きたら「犬にでも噛まれた」
とでも思わせときゃいいだろ」

「…：何という駱駝…」

したり顔で言う駱駝の横で、ナハトがため息混じりに呟いた。

ツバメを気絶させたのと同様頃、こちらに向かってくる足音が聞こえたのをターナは聞き逃さなかった。

もしかしたら敵かもしれないと、すぐに戦闘に入れるように腰に下げた剣に手を当てる。

ギイと腐りかけた木の扉を開けたのは、見たことのある兵士の姿だった。

「こちらで何か大きな声がしたので、様子を見に来たのですが、いったい何があったんですか？」

「いや…。特に大したことは無かったのだが」

説明の仕様があるだろうか。あれだけの惨事を。

事細かに説明をしたところで、相手が納得するように話せるかという自信がという事ではなく、事情が事情だけに話しくいというのが先に立つ。

「…？ まあ、大したことは無さそうですね。私はこの奥に居る者ですが、冒険者の方に薬の配布を行なっております。…といっても、気付け薬位なものですが。今御入用でしょうか？」

「気付け薬…ですか？ どうしてまた。私が最初に入った時には、そういうた物は…」

ランベルトが訝しげに兵士に尋ねる。

一度洞窟に入った経験のあるのは、この中では彼だけだからだ。

「はあ、最近になって洞窟の奥で幻覚症状を引き起こす冒険者が増えたという事で、急遽気付け薬を必要な冒険者にお渡しすることになりました」

「なるほど。それは必ず貰えるという事なのか？」

「いえ…。急なことだったので、在庫が余り充分でないのですよ、実は。」

もし、そういった方が出た時にだけ配布をしています。必要な時があったら、私の所にお越しください」

そう言うと、兵士は再び扉の奥に戻っていった。

「気付け薬のことは、頭の片隅にでも置いて、この伸びた奴らをどうするかねえ」

ドーガがみっともなく気絶している冒険者達を見る。

おそらく、アルティメットのようなものが苦手だったのだろう。あの時の恐怖に引きつった顔が鮮明に思い出せる。

一人の冒険者の側に、たっぷりの水を湛えた井戸のようなものが見えた。

ドーガはそれを見て何かを思いついたのか、井戸の方へ歩いて行く。

「水を汲んでどうする気だ？」

「このままこいつらをオネンネさせておく訳にもいかねえだろ？　ここが、どこだか忘れたのか？」

…言うまでもなく、噂のツン・クーン洞窟である。

ここには雑魚と呼べるようなモンスターもいるが、弱小冒険者はそれでも脅威である。下手をすればここで全滅という事もあり得る。

少しでも生存率を上げておくことが、最も重要視されるであろう。

ドーガは革袋を取り出し、水を汲む。

そして、洞窟の冷気で冷やされた水を、情けなく気絶した冒険者の顔に容赦なく浴びせる。

「…うわっぶ！」

氷のように冷たい水を顔面に浴びせかけられた冒険者は、その冷たさに驚き飛び跳ねながら起き上がる。

残りの冒険者にも同じように水を浴びせ、目を覚まさせる。

「…いやあ、ホント恥ずかしいところを見せてしまっただけで申し訳ねえ！　オレら新米の冒険者でさあ…」

「やっばりな。ま、生きてるだけでありがてえと思うこったな。ましてや、他の奴らに助けられるということは、この先ないかもしれねえから、もう少し腕を磨いてからここに入ってくるこった」

くどくどと説教された挙句、駱駝に半分尻を蹴られながら、洞窟の入口に戻される新米冒険者たちを、半分情けないという顔でターナたちは見送った。

*

ドンドウンの酒場は何時も賑やかだ。

歴戦の冒険者から、なりたて新米の冒険者まで、レベルも種族も職業も何もかも様々だ。

日々新しい冒険者がやってきたり、今まで馴染みだった冒険者がロストしたりと、入れ替わりも激しいので、同じメンツばかりで飽きるということもない。

…むしろ、飽きるほど見る顔が、何時もこの酒場に居る方がいいのだろうが、冒険者という職業柄そうも言っていられないだろう。

冒険者というのは、死と隣り合わせの職業だとも言えるだろう。

如何に屈強な戦士であっても、首を撥ねられたりでもしたら、すぐにあの世に逝ってしまう。

蘇生が可能とはいえ、絶対に失敗はしないという保証もないわけで、本人の信仰などが低ければそのまま向こう側の世界の住人のまま帰ってこないということもある。

それが向こう見ずな軽いノリで、冒険者の世界に踏み込んだ者なら、笑い話の種にすらならない程だが、ただ真面目に冒険者をこなしてきた者がそうなたときは、その者の不運に皆が哀れむ。

しかし、そういったシンミリとした雰囲気は少ない。

逆にこれからの仕事への期待や好奇心の方が強いのか、絶えず賑やかな話が

あちこちから聞こえてくる。

「いらっしやい…」

周りの喧騒で店の扉が開いたり閉じたりする音は分からないが、なんとなく感覚でわかる。入ってきた人数も、だいたいは。

昔の癖が抜け切れていない証拠だろう。自分ではもう出ないだろうと思っていたが、一度身についた癖はなかなか取れることはない。

「…珍しいな」

「滅多にお目にかかれないぜ、あんなのは」

周りの冒険者が、近くを通り過ぎた人影を見て口々に言った。

この場に居る冒険者の半分ほどが、外の泥やこれまでに戦ったモンスターの血などで汚れた鎧や、日に焼けた黒い顔をしている者など、見た目にはあまり綺麗とはいえない風貌が多いからだ。

それが故に、上級職というクラスの間が、一人でもこの人集りの中に入ると異様な感じに見えてしまう。

「ここではまず目にしたことがないな。あれは…」

「君主か」

「どこかの王族か何かだろうか…？」

様々な憶測がヒソヒソと飛び交う中、まっすぐにカウンターに進み、座る。

左腕が、テーブルに置かれたランプの灯火に照らされ銀色に光る。それは眩しいほどではなく、長年使い込まれた様な感が見受けられる。どうやらただの飾りの様ではない様子だ。

「いらっしやい。貴方みたいな高貴な人は、この店じゃ初めてでしてね…」

店主は相手に失礼のないように話してみるが、慣れないためか、少しぎこちない。

「はは。私の地位なんて気にしないでくれ。私も今では、すっかり冒険者の一人なんだからな。とりあえず、なにかもらおうか」

美しい金色の髪に、見ただけでも吸い込まれそうな程の深い蒼い瞳。そして銀色の左腕。

どこかで聞いたような、見たような記憶が脳裏をかすめるが、それだけで何も思い出せなかった。他人の空似ということもある。今はそれ以上考えることは止めた。そのうち何か思い出すだろうと。

「…ところで、ここには誰かいないか？」

「お仲間のことで？」

そうだと頷く。相手は、こういうところは初めてではないという様子が、その一言で窺い知れる。あちこちの酒場を渡り歩いている。そういう風にも見取れる。ただの貴族の道楽でもなさそうだと、直感した。

「これが、なかなかいい仲間に巡り会えなくてね。私が君主だと知ると、皆畏（かしこ）まってしまつてね。もっと対等に話ができたり、付き合える仲間が欲しくてね…」

「ふうん…。では、帳簿にお名前を書いていただけますか？」

店主が冒険の共を募るための帳簿とペンを差し出す。

君主は、一人一人の名前を確認するようにページを捲り、名前を書く。

ふと、ペンが途中で止まる。

「…懐かしい御人がこんなところに居るとはね」

自分の名前のすぐ上の名前に見覚えがあるのか、それを見つけて小さく笑った。それは懐かしい友人と暫くぶりに会ったような、そんな感じの笑みだった。

「……。これでいいだろうか。何か不備があったら言ってくれ」

帳簿を渡すと、グラスに注がれた酒を一気に煽る。

「…確かに。早ければ今夜中にでも申し出がありますよ。しばらくはこちらにいらっしゃる御積りで？」

「そのつもりだ。また明日来る」

そう言うと、君主は颯爽と酒場を後にした。

*

「また見つけたでし！ これで3つ目の迷宮ハーブでし！」

洞窟のジメジメした土にへばりついて、無心に地面に生えているハーブを筆で取るシューネ。顔と言わず、服までも土まみれになっている。

「そんな泥臭い顔で乗ってくるなよ！」

駱駝に尻をこづかれても、気にせず満足行くまでハーブを筆で取る。

すでに彼女の鞆の中は薬草やら買い込んだ薬で満杯であった。

「これで街に帰ったら調査しまくりでし！」

ぱたぱたと土をはたき落とし、満面の笑顔で一行に収穫物を見せる。

「失敗した奴は飲みたくないからなっ！」

「新作ができたら真っ先にラクダさんにあげるでし！ 実験台でし！」

薬草師から実験台などという単語が飛び出すのは些か尋常では無い気がするが、その笑顔からは悪意を感じ取れない。

「それにしても、異様だな」

「何か、おかしな事でもあるのでしょうか？」

ノームと駱駝の見苦しいやり取りを横目に、ナハトは何か不穏な空気を感じ取っていた。

それが何なのかは、他の仲間には分からなかった。ただの洞窟特有の冷たい空気しか感じ取れなかった。

「エルフの錬金術師は、この洞窟は初めてじゃないだろうか？ それなのに、この異様さに気づかないか？」

チラリとランベルドを冷たい眼差しで見る。

「いえ…特に何も感じませんでした…」

「…ふん」

期待はずれ、と言った感じで一瞥する。そして、長く続く道の一点を見つめる。特に怪しいものはないが、どうやらそこから何かを感じているらしい。

「これから先、何が起こるかわからない。生き延びたいなら、周りの微妙な変化にも気をつけておいたほうがいいだろう。この奥から嫌な空気がしている。他の魔物とは違う」

「なんですって…!」

「まさか、噂の元凶が…?」

「まだそうとは限らんが」

奥から誰かの叫び声が聞こえてきた。

恐怖に怯えたような叫び声が、反復するかのようになり、二重三重に重なってこちらに響いてくる。

「何が…一体何が」

「判らないが、放っておく訳にはいかないだろう。駱駝! さっさと、そのチビを連れて来いっ!」

「お、おい待てよッ!!」

いつの間にか、すっかりシューネと同じように、全身泥だらけになっていたドーガが慌ててシューネを背中に放り乗せると、のったのたと走り、その後を追う。

未だにその叫び声は各々の耳に入ってくる。

奥には扉があった。声はそこから聞こえてきていた。

勢い良く扉を開けると、そこには異様な光景が目に見え込んできた……

あとがき

今回は短めになってしまって申し訳です…。

初戦の相手が Ultimate というのは、これから先のイベントでの伏線だったりそうでなかったり（どっちだ）

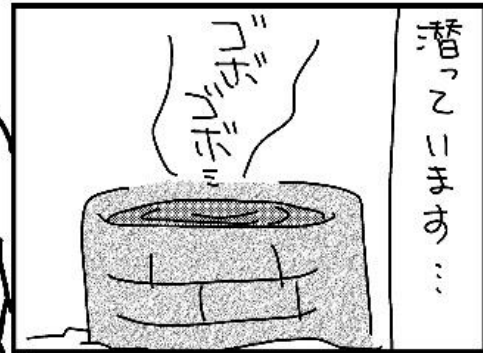
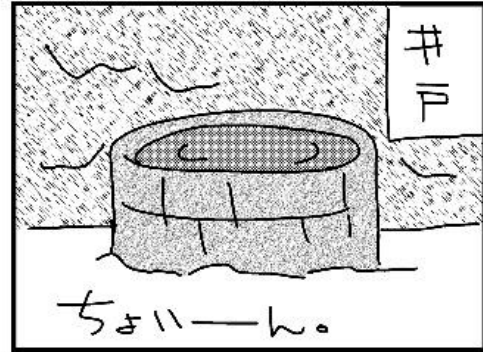
謎の君主との絡みも、今後出てきますんでね。

これ書きながらゲーム進めてるので、進行状況としては最遅だと思います（苦笑）

なにぶん、進めながら内容考えてますんで… ><ふええ←

それではまた次回（´ω`）♪

2012 9/21 榎本 タケコ (@Enotaken)



WIZ5。

おねえ
まごか。

おー
おー

HANDGEMITTER
MILLIONER

おねえ

